と見るを正しとする説 Radloff, Das Kudatku Bilik p. LXXXI に見ゆ、されど之は toγuz-oγuz にして、従つて突厥碑文に記さるゝ古き名稱の殘れるものに非るなからんか)、すべて以上述ぶる所によれば碑文の Oγuz と史書に見ゆる Ouigours との同一なることは疑ふ可らざるものなり、故に Oγuz なるものはこゝに問題となれる民衆若しくは部族の本來の古名にして、突厥にてはかく用ゐられ、Ouigour は更に後の名稱にして、或は民衆若しくは部族の或る政治的團體の名稱なりと認めざる可らず (Inscription de l'Orkhon p. 147, note 22) と説き、ついで

(三) Marquart 氏は一八九八年 Die Chronologie der alttürkischen Inschriften を著はし、其の中に於て默棘連可汗及び闕特勤の碑文を以て、支那の記錄と對比する時は Tongra(同羅)・Bajyrqu(拔曳固)・Hun(渾)・Sukit (思結)・Ädiz(阿跌)・Sap (霫) 及び本來の Uigur (廻紇) が Oγuz の中に數へらるべきものなることは全く疑を容るべきなし、然も後者卽ち回鶻は政治的中心なる九姓卽ち toquz oγuz を構成したりしものなりといへり (S. 23)

(四) 此等の諸説の後に Hirth 氏は一八九九年 Nachworte zum Inschrift des Tonjukuk に於て、鐵勒の大部族中、九姓 (Toguz Oguz=氏はいふ迄もなく藥羅葛以下唐書に擧げたる九姓を指せるなり) は骨咄祿 (卽ち裴羅をいふ) の時只だその一小部を成し Uigur は狹き意味に於て更にその一小部を成せるものなり、されど又 Uigur は既に七世紀の初めに於て回鶻姓の藥羅葛氏として Selenga 河上に住み、十萬衆を有し、半は兵士として認めらたるものなり、後に至りて九姓回鶻なる團體は、單に Uigur を意味するものとなれり、九姓卽ち Toguz